

中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館

①

6月1日に開幕した特別記念展第2部では、庄内藩中興の祖と称された酒井家9代忠徳の業績と生涯をたどっています。

この連載では、豊富な歴史資料をもとに、藩主酒井家のお家事情、庄内の災害や大飢饉と藩政改革、そして藩校致道館の創設、教育内容などを紹介します。どんなお殿様だったのか、想像が膨らんでしまうエピソードもありませんので、ご期待ください。

◇ 忠徳は、宝暦5（1755）年、酒井家8代忠温の三男として江戸神田の藩邸で生まれました。前年結婚した正室の為姫との子であり、兄の忠順ではなく忠徳のようですが、実はこの辺に理由があるのかも知れません。由があるのかも知れませんが、忠徳の系図【図1】をみてみると、祖父とも身分が高く、申し分のない出自です。しかも幼い頃から才知に優れていたそうです。父忠温が病に伏していたこともあってか、幕府の老中を務める祖父忠寄は忠徳を深く寵愛し、常にそばに置いたといわれています。

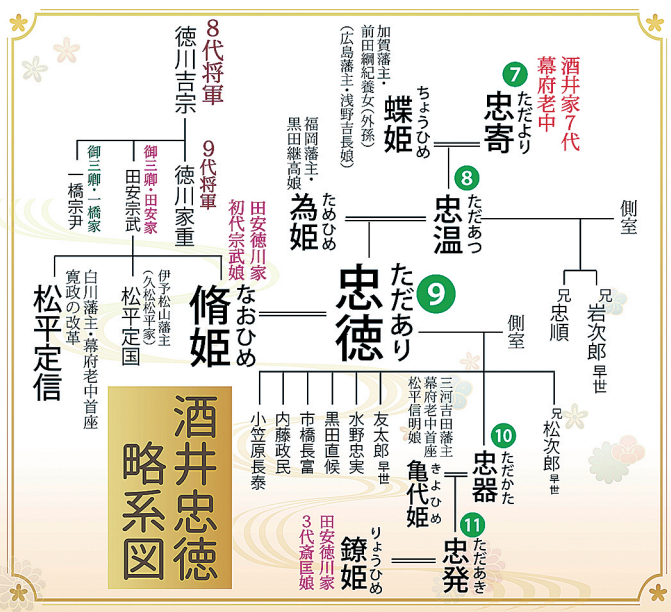
名門の家に生まれて

将来を嘱望され、家族からの愛情を一身に受けて幼少期を過ごした忠徳ですが、

祖父、父との別れは思った以上に早いものでした。数え年12歳の時に祖父忠寄が逝去、病弱な父に代わって政務を執ることになります。家督相続した父忠温は、療養の甲斐無く在位僅か8カ月で逝去しました。庄内の地を踏むことなく亡くなった忠温は、鶴岡大督寺ではなく、江戸の菩提寺・清光寺へ葬られました。忠徳は、13歳で家督を継ぐことになりました。満年齢で11歳6カ月、現代であれば小学6年生にして庄内14万石の藩主という重責を担うことになったのです。



普通を考えれば、後見人や家臣に政治を任せる年齢ですが、名君の片鱗をみせるエピソードがあります。本丸近くから出火し、風も強かったため、急いで登城してみると、江戸城は大変な混雑になっていました。忠徳は、いつも持ち歩いてある金の采幣（紙の房をつちゅう）。展示は約20年ぶり

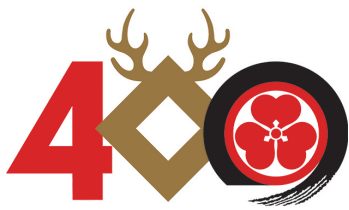


【図1】酒井忠徳の家系図
けた采配。大将が指示や合図をする道具）を出して、徳川將軍家の方々が避難する道を開けるよう、高らかに指示したのです。大勢いた人々も、これを聞いて鎮まりました。

忠徳は後日、將軍家から「さすがは名家の子孫だ」と、褒められています。そして何となくことごとく5年後、忠徳は田安徳川家の信姫を正室に迎えることになりました。（致道博物館主任学芸員・佐藤淳）

◇掲載にあたり

酒井家庄内入部400年記念で、鶴岡市の致道博物館は特別展第2部「中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館」を7月18日（月）まで開催している。忠徳公に関する逸話などを同館の佐藤淳主任学芸員に執筆いただいた。9回連載予定。



酒井家庄内入部400年